

令和6年度第2回 立川市文化振興推進委員会 会議録

|          |                                                                                                                                                                                                                 |
|----------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 開催日時     | 令和6年7月18日（木曜日） 午前10時～正午                                                                                                                                                                                         |
| 開催場所     | たましんR I S U R Uホール（立川市市民会館） 5階 第4会議室                                                                                                                                                                            |
| 次第       | <p>1. 協議</p> <p>（1） 立川市第4次文化振興計画の現状と課題について</p> <p>（2） 到達目標、取組方針について</p> <p>2. その他</p>                                                                                                                           |
| 配布資料     | <p>資料1 立川市第4次文化振興計画の現状と課題について</p> <p>資料2 現状と課題に対するご意見について</p> <p>資料3 ウェルビーイングと文化芸術振興</p> <p>資料4 第5次文化振興計画 施策の体系（案）</p> <p>資料5 A委員からのご意見</p>                                                                     |
| 出席者（敬称略） | <p>[委員]</p> <p>委員長 今井良朗、副委員長 瀧川淳、</p> <p>小林優貴、鈴木美智子、高木誠、成清北斗、堀江けんいち、松寄ゆかり</p> <p>[事務局]</p> <p>産業文化スポーツ部長 井上隆一、地域文化課長 轟誠悟、市史編さん室長 齋藤安則、地域文化振興財団事務局長 足立香織、地域文化振興財団事務局次長 浅沼宏、地域文化課文化振興係長 稲福秀哉、地域文化課文化振興係主任 郡麻里</p> |
| 公開及び非公開  | 公開                                                                                                                                                                                                              |
| 傍聴者数     | 0人                                                                                                                                                                                                              |
| 会議結果     | <ul style="list-style-type: none"> <li>・立川市第4次文化振興計画の現状と課題について意見交換を行った。</li> <li>・ウェルビーイングについて情報共有を行った。</li> <li>・到達目標、取組方針について意見交換を行った。</li> </ul>                                                             |
| 担当       | <p>産業文化スポーツ部地域文化課文化振興係</p> <p>電話 042 - 506 - 0012</p>                                                                                                                                                           |

## ■会議内容（要旨）

- ・事務局より、資料の確認・説明があった。

### 1. 協議

- ・立川市第4次文化振興計画 令和5年度の主な取組状況

（事務局）おはようございます。（資料の確認の説明）資料5の確認ですが、本日欠席のA委員よりご意見としていただいたものです。また、皆様にご確認をお願いいたしました、令和5年度第2回と令和6年度第1回の文化振興推進委員会の会議録について公開版の方が出来上がりましたので、あわせて皆様に机上配布をしております。こちらにつきましては、お気づきの点等ございましたら、7/25を目途にご連絡をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。配布資料については以上です。

（委員長）それではこれから資料についてご説明いただきます。本日は皆様からいただいたご意見をもとにした審議かと思えます。私の方でも多少いくつか意見を出しましたが、これまでの会議の中で出た意見をある程度まとめつつ、自分自身の考え方を入れて提示いたしました。ですから皆様から本日全体ご意見をいただく段階でこのことを考慮しつつ意見が出されればよいと思っております。よろしくお願いいたします。

（事務局）そうしましたら資料1について説明をいたします。こちらは6月中旬に委員の皆様へ資料をお送りして意見をいただいたものから大きな修正ということはございませんでした。すでにお目通しをいただいているものではございますが、改めて説明をいたします。

#### （事務局より資料1について説明があった）

資料1の最後の部分ですが、文化芸術に携わる団体同士のネットワークづくりが求められているというところですが、これにつきましてもこれまでの議論の中でB委員からご意見がございました通り、今までの市の計画のところでも市が（主体となって）「つなげる、ひろげる」となっていたところを、「つながる、ひろがる」というように自主的な流れを、ダイアログという場所を設定することによって、後は自発的に動いてもらえるような流れを感じたところです。全部を整えるのではなく、何かきっかけを作れる場を設けることにより、自発性によってまた動いていくようなものを感じたのが今回のダイアログでした。以上、資料1のところにつきましては今までのご意見と最近の見聞き体験した活動の報告ということでいたしました。以上が資料1の内容です。

続きまして、資料2をご覧ください。

#### （事務局より資料2と資料5について説明があった）

資料2の「ふれる、たのしむ」というところに「ウェルビーイング」という言葉がキーワードで出てきますが、ウェルビーイングと文化芸術振興について、副委員長より資料3をいただいておりますので、副委員長からご説明をお願いします。

（副委員長）おはようございます。ウェルビーイングという言葉が前回の会議で出まして、自分自身もそんなに詳しいわけではないので、自分でまとめたものを皆さんにご提供でき

ばと思います。

**（副委員長より資料 3 についての説明があった）**

紹介した取り組みに共通するキーワードを自分なりに考えてみると、1つはやはり文化芸術が人々と社会がつながるハブになるということ、それから心身の幸福につながるということ、またネットワークの醸成につながるということ、これは世界と繋がるハブにもなるということかもしれません。それから異世代交流、また障害の有無を問わず誰もが参加できるまちづくりと。こういうことは実は今までこの文化振興委員会で話し合ってきたことであって、新しい取り組みを作り出すというよりも、いままで取り組んできたことをウェルビーイングの視点で組み替えるということになるではないか、というのが私の意見です。

**（事務局より、補足の説明が入った）**

（委員長）ありがとうございました。副委員長からとても丁寧に、ウェルビーイングについて説明していただきました。調べていただいたのですごくわかりやすくなって、話を聞いていながら、立川市がこれまでずっと続けてきた、この文化振興計画というのは、ある意味ではそのことを全体としてはかなりやってきている。ただそのことが明確に意識されていなかったということもあると思います。それと皆様からのご意見をまとめた資料がありました。で、この意見をまとめた資料と今説明にあったウェルビーイングという点を含めまして、皆様からまずご意見・ご感想などいただきたいと思います。大体もう次の方向性が見えてきたような気はしますが、そのことをより言語化し、具体的にそれを形にしていく。そういう繋がりになるのではないかと思います。いかがでしょうか？

（C 委員）これは逆に、教育委員会で議論された方がいいのかな、と。未来の子ども達に向けて今の勉強をね、こういうことを元にしてやってほしい。子ども達にどう、こういうことを教えていくか。もし機会があれば教育委員のかたも知ってほしい。これからの子ども達の未来に教育のあり方ね、大事だと思う。そう思いましたね。

（委員長）そうですね。教育の全体の方向性は国が出していく方針であり、それとそれぞれ地域での委員会という事になりますけれども、それだけではなくて、最終的には全体でそれを支えていけるような環境を作っていけることが、例えば立川市であれば文化芸術のまちづくり協議会や財団、そういうものをかなり充実させていくことで教育そのものを刺激していくことが必要なのだろうという感じはします。ですから今、C 委員がお話されたように、教育のところまでいくと僕らは見ていると不満だらけですよ。

私的なことですが、私はちょうど 1951 年くらいの、まだ色々な新しい教育が行われているころの教科書を使った授業を受けました。柳田國男さんとかが教科書を監修している時代。そういう頃から比べるともう全く違います。ああいう教育がなぜなくなったのかということも含めて考えていけば、これは補完できるのはもう教育だけではないということです。やはり今全体が支えている様々な組織がそういうものをきちっとやっていければそのことはできる。それを全部教育に任せると結果的には前もあったようなゆとり教育とか、ああいう話が段々とか、いびつな形で出てくとかね、そういう風になっていきますから、そういう意味でも今回のウェルビーイングというのはかなり大

きなキーワードになるような気がします。

(C 委員) 今心配しているのは、子たち達に投資の勉強とかをさせていること。それって逆に怖いかなあって。なんかね経済界の方にもずっと引っ張られていくよね。架空の話ではあるけれど投資で儲けてっていうのもどうなのかなって、僕は疑問に思っている。

(事務局) 確かに、投資のところと文化芸術の心の豊かさと違うところがあるかもしれないですね。また子ども達の感性を育むということで財団が、教育委員会との連携を図っているところが立川市の強みだと思っているところです。ファーレ立川アート鑑賞教室もそうですが、アウトリーチ事業としてそれぞれの学校の方に出向いて音楽鑑賞教室を行ったり、ご要望があれば落語とか他の芸術文化に触れるような機会を子ども達に身近に提供したりしているところがありますので、そういうところは今後も立川市の強みとしてはさらに進めていきたい。投資(金融教育)というのも一つの教育として必要なものかもしれないけれど、それだけではない、委員長のいう通りで、色々なところで支えあうような形で子ども達を育てるということができるのが望ましいのではないかと思います。

(委員長) そのあたりは難しいですね。

(C 委員) 悪しき資本主義というか、「金持ち=幸せ」というか。

(委員長) ストレートな形でいくのではなくて、要するに元々は物々交換があって、そういう流れの中で貨幣が生まれたというような、そういう、子ども達が環境の中で経済がどうやって動いていくのか、仕組みみたいなものがわかっていくことを、ゲームのような形でやれたらいいと思います。

(事務局) 今、C 委員の方から投資に関する子ども達の学びについてご意見がありました。確かに投資の仕方を学ぶという側面があるかもしれませんが、意図としては社会で騙されたり、知らないことによって多くの被害に遭ったりとか、そういう事を防ぐためにも、やはり投資ということを正しく知って、それはどういう側面があって、どういう意味合いでそれをやっていくのか。そこのところを教えていくということで考えられているようです。つまり、危機管理的な意味合いで教えていくという側面もあるようです。勿論、危機管理というのはある一面なので、C 委員がおっしゃるように、もう一方ではこういう風にやれば稼げるな、少ないお金でもこんなに多く儲かっちゃうな、そういう面もあるので、そこだけ取り出して教えてしまうと良からぬ方向に行ってしまうかもしれない。しかし危機管理という意味合いで子ども達には……。

(C 委員) 現場の先生は理解しているかな。

(事務局) そこは教え方というか、どう教えていくかということはあるかもしれません。

(委員長) 色んな形で「知ること」が必要な場合がかなりありますね。他にございますか？D 委員いかがですか？

(D 委員) ウェルビーイングとかの新しい言葉が出てくる場面でよく言われるのが、今までやってきたことが言語化されただけ、とか、意識されただけということです。でもそれはすごく実は大きなことで、当事者だけでない全国民、世界の中の対応・基準を変えていきたいと思います。そこで価値観が大きく変わるっていくことになるって考えていて、今まで価値があったものの価値が減っていき、価値がないと思われていたものの

価値が出るという社会に変わっていく。併せて文化芸術に対する意識みたいなのが変わっていくと思いますし、それこそ小学生が投資を学ぶということが、もしかしたら将来子ども達にとって文化芸術への投資が価値あるものというように思ってもらえる価値観に変わってくるのではないかなという風にも思っていたりもします。僕も観光とかをやっていて、よく奥多摩の方の人達と話す「文化と経済活動」と似たような話で「環境保護と経済活動」ということがいわれていて、環境を守ろうとする時は人の流れが制限される、という話です。ただSDGsもウェルビーイングも、絶対ファイナンシャルウェルビーイング、経済活動が回っていかないと何も持続可能なものがないということが最低限含まれている。その意識を持ちつつ、今後変わっていくであろう価値観の転換に、しっかりと地域として準備していくことが一番大事なのかなと思います。

(委員長) そういう意味では色々なことがこれまでに全部醸成されてきているとは思いますが。ちょうど今の話を聞いていて、『文化経済論』という本(※事務局注：おそらく『日本文化の経済学』ダイヤモンド社 1979 年)を出された並木信義さんという方だったかと思うのですが、とっても面白い話なのです。並木さんは元官僚の方で、経済を文化からとらえていけない限り駄目だ、という視点で経済を論じていた。僕はすごく面白いと思って、こういう形でどんどん経済の中に文化という意識が入ってくればと変わるだろうなと思っていたのですが、結局並木さん自体もその後あんまり出てこない。ご存じですか、並木信義さん。ご存じないですかね。結果的にはそういう形で埋もれてしまったのだと思います。だからそういう意味で色々な側面からもう一度とらえなおすということが当然大切で、前回の委員会でも文化と経済が全く関係ないということは有り得ない、必ずどこかでは繋がっているという話が出たのですから、そういうことも含めて考えていくことも必要なだろうなという感じはします。E 委員いかがでしょうか？

(E 委員) 育むというキーワードで、自分達の団体の活動というのもそういった地域だったり、行政だったり、市民だったりとの主体的仲介者になるということをよく話し合っているところがあったので、共通しているところがあるのかなと思いました。そういう点で力になればいいなと思います。

(委員長) そうですね、特にこの委員会は文化芸術に関わっている方、経済に関わっている方、色々な方がいるわけですから。教育もそうですね。そういう意味で幅広くそういう意見が出る、誰もが理解できる形というものが出来上がっていくことが望ましいと思います。F 委員いかがですか？

(F 委員) 私もウェルビーイングについてよく知らなくて、今日ご説明いただいたら、わかりやすく良かったです。やはりこれから考えていくにあたってウェルビーイングを柱とした計画案を作っていく事の必要性をすごく感じました。また、立川自身が今ある社会資源をどうやって言語化していったら、皆さんにわかりやすいものにするということがすごく大事ななと思います。SDGs も初め何だろうと思ったのですが、あれだけ色々なところで目にするようになると、子どもから大人までSDGsがこんなにも身近なものになって、会話をするときも出てくるというのは、言語化してわかりやすくして発信していくということがいかに大事なのかということだと思います。すでにある

社会資源をどれだけ上手に使っていき、整理するのかということがものすごく必要とされていると思います。あと私事ですが、この間お伝えしたふるさと納税の件も、総務省から OK が出まして、すでに準備を始めていて、立川在住のオールブリュット作家さんの作品を返礼品にするために動き始めています。クラウドファンディングではないですけど、そういうものにも繋がっていくのかなと思っております。もう 1 つ市民活動団体のボランティアとして販売しているものではないのですが、私どもが過去に 11 冊ほど発行した作品集や写真集があります。データがきちっと残っているものを、ちょっと古いやつとか壊れているやつもあるので、それを今度 7 冊ほど電子化して図書館の方で発行していただける事になりました。電子化をすると、全国の人達に見ていただくことができ、今後の活動とかにも繋がっていくのかなぁと思っております。あるものをうまく使いながら発信をしていくということ、まとめていくことはものすごく大事なのではないかなと思います。

(委員長) まさに資源をいかに活用するか、物と人の両方、あと場所ですよ。「人」はもう、すでにダイアログでもお話があったように、色々な人がいるわけです。そういう人材資源が立川の中に沢山埋もれているのだとすると、そこをもう 1 回きちっと注目していきながら繋げていきたいと思うし、「物」もそういった形で新たに資源を活用していく。そういうことが次に繋がっていく形になるのでしょうか。G 委員いかがですか？

(G 委員) 私も今まで結構意見を言わせてもらっていて、先ほど委員長も言っていたけど、第 5 次の振興計画の方向性も見えてきているかなと感じています。ちょっと感想的な発言になっちゃいますが、ウェルビーイングという言葉は今、小さい子でも使うようになって、うちでも資料を見てきましたが、改めて副委員長から資料が出されて、自分自身でもハッさせられました。それと先日、たまたま J:COM テレビを点けていたら、立飛さんの結構長いコマーシャルをやっていて、相撲のことや劇場のグリーンスプリングスの一帯のことなどを紹介していて、芸術に関係ある事を色々と立川の画像を流しながらやっていました。これを見ている人、いっぱいいるのだろうなと思ったのです。テレビの力はすごいと思うので、こういうことを立飛さんはやっているのだから私も初めて知ったのですけれども。また、A 委員が出していたのですが、最近立川が、東京の中では住みよい街・住みたい街ということで不動産会社のランキングでもベスト 10 に上がってきている。東京で第 3 位ってすごいと思う。私は(千葉県)市川の方に住んでいたのですが、市川じゃない立川ってすごいなあと思いました。なんか今オリンピックが始まって、昨日もテレビでやっていたけれど、パリの市長さんが川に飛び込んで、この川は綺麗だって PR した……。そういうノリではないですけど、イベントを通した時に何かアピールしていく力というものも大切なかなと感じています。メジャーではないですけども、来年はデフリンピックっていうのを日本で初めて招致して、1924 年に初めてデフリンピックが開催されてちょうど 100 年の節目だそうです(事務局注：東京大会実施は 2025 年)。ニュースで見たけれども、そうすると公式ウエアの話が出てきて、ブランドはイタリアだとベルサーチだとかフランスだとあれだとか、日本はまだ発表してないらしいのですけれども、ユニクロが、SDGs というのか、店舗で回収したものを

再利用した素材を使ったものを、オリンピックの正式なウェアとしてスウェーデンが採用したことを言っていたので、さすが世界のユニクロになっているのだなと思いました。そういうイベントで立川として発信していけるものもあるのかなと。デフリンピックでは東大和の駅前にあるボーリング場が1つの会場になっているそうです。駒沢が主の会場ですけど、東大和の他に府中も会場になっていたと思います。立川市は何もなかったと思うのですが。あとこれはまちづくりの話になると思うのですが、フランスのパリの街では今劇場でやっている公演のチラシを配っていたり、当日のチケットが余っていると安く売っていたりするじゃないですか、ああいうものをやらないのかな、例えば立飛さんの前とかで、と。当日だと半額以下になっちゃったりする。アメリカやフランスではやっているから、立川市もやらないのかな、やったらいいなと願っています。そういう街の見せ方っていうのですかね、そういうのも文化であるのかなと。

(委員長) 今お話にありましたように、民間との連携、これはやっぱり次の大きな課題だと思います。例えば立飛とか。この間全く別の場所でたまたま「実は私立川に絡んでいる」という話を聞いて「え…どういうことですか？」って聞いたら、グリーンスプリングスに絡んでいる人が知り合いで2人くらい居て、「そういうことなら、だったらもうちょっと立川市と協力できるように働きかけてよ」という話をしました。そういう感じで色々なイベントや企画の中で、都内の人が実はどんどん入ってきているのですよ。せっかくそういう形で動いているなら、もっとすくっていかないともったいないなあって思ったのですよね。それとC委員やG委員が言っていたように、パリとかニューヨークでは、その日の当日券がものすごく安く買えますよね。そういうのが必要だと思います。ニューヨークやパリのように、そういう意味での文化の触れ方、やっぱりそうやって、半額くらいでチケットが買えて、観ることができるとかね。すごく大事だと思います。

(C委員) 青年会議所や商工会議所にも言ってみようかなと思うのですけれど、うちはフィラデルフィアのバレエ団が来ているのだけれども、やはり結局野球などと同じで、劇場も年間シートというのはほとんど企業が買っています。だから本当は、立川市でも、市民オペラもそうだけれど、義理でもいいから各企業がそのイベントに対して年間シートを買ってくれば、公演としては成り立つ訳です。そういう働きかけ、ちょっとでもいい、2枚でもいいから。一般市民用もありますけれどもね。外国の場合は企業が買っています。福利厚生の一環で。芸術が好きな人はオペラとかバレエを観に行くとか、スポーツを観たい人は野球とかバスケットとかフットボールとかね。そういう風に企業は必ず、半分義務としてでもやっている。だから立川市の企業ももっとそういう面で見えていただいて。大したことはないと思います、一番安い席だと2,000円位ですし。買っていただきたい。そういうことを僕も立飛やたましんにやってもらっている。やっぱりそういうことをね、芸術活動は今後寄付だけではなくて座席を買ってもらうこと、それが1つの発展につながる。こういうことを新国立はやっていきますけど、ちょっとこれ今後…

(委員長) そうですね、前回から出ているファンド、このあたりも文化芸術のまちづくり協議会も含めて、立川に関係している企業から額をもう一桁くらい上げてもらえるような、そういう方向性が必要なのだらうと思いますけれどね。

(C 委員) やっぱり企業が地元貢献するのも 1 つだと思います。余計な話で、孫に聞いたのだけれど、『怪獣 8 号』の舞台は立川だよ。今ちょっとずつ見ているけれども。あれはどこが呼んできたのですか？

(事務局) 壽屋さんかな。今サンサンロードに怪獣 8 号のフラッグがかかっています。等身大パネルも飾ってあったりしています。

(C 委員) そういうこともしているのですね。

(委員長) そういうのも立川がメジャーになっている証拠、作中でつぶされるのとかも含めてね。東京タワーとか全部そうですね。では B さんの方から少しご意見を。

(B 委員) ウェルビーイングは、僕は芸術活動に取り入れていますから、すごく重要だなと思います。これまでの計画の評価は数値というか、その達成に頼っているところがありました。ですがウェルビーイングを取り入れることによってさらにそれ以外の様々な要素ですとか関係性とかを見出せる。つまるところ文化芸術を社会化させるとか、これまでのようなものであるとか私達は関係ないとかじゃなくてみんなのものになっていくということだと思いますし、取り組んでいくことが必要なのだと思います。

(委員長) ひと通りご意見をいただきましたが、他に付け加えることとかありますでしょうか？

(事務局) 先程 D 委員から、今まで普通に行われてきたことを言語化する、色々多様な社会だからこそ、大事にしてきたことを言語化してもう一度皆で共有していく、というのは私の中では個人的にストンと落ちたことです。ウェルビーイングというのは、あるべき姿、本来置かれている姿なのかと。副委員長が色々調べたこの資料をじっくり読むと、あーそうか、SDGs が今度はみんなで取り組むという方向になるのは、なんとなくそれもわかるなと。また先程 F 委員から、今あるものを活用して発信していくというご意見をいただきました。立川もまだまだとてもいいものがあるのですけれども知られていない。例えば農業でいえば、ブロッコリーは東京都内で生産量ナンバー 1 です。東京都内では練馬区と立川市と競っている状態です。そこをうまく発信ができれば農家さんも豊かになりますし、ブロッコリーの生産量第 1 位ということでそれを売りにして周辺にも周知ができるのではないかと思います。まだまだ埋もれているものが沢山あるので、これをうまく発信できるといいなと思います。また、C 委員からありましたけれど、企業として地域貢献が必要だと。立飛さんは企業としてもそうですけれども、地域に貢献しようという意識が強い企業さんなので、そこは立川市と手を組んで何かをするのは有りなのかな。今あるものというのもこれからどんどんできていく。うまく発信できれば市民の定着に繋がって人口も増えると。自然減を社会増で補う、そんなことできるのかなと思います。先程デフリンピックの話も G 委員から出ました。立川出身の岡田海緒選手という方がいるのですけれども、その方がいい記録を出してこの前のハーフマラソンでも 10 キロのレースで、日本記録を出した。公認のコースですので、それもまた立川には公認のコースがあって、日本記録が出たところで走れますよということを発信できるかなと。岡田海緒選手も立川のことを発信していただきますので、色んな方の手によって発信がされていくというのは 1 つの文化といえるのかなと思います。周辺の方に色々聞くと、立川のことをご存じだったりしますのでそこはいいチャンスなのかなと思いま

した。

(委員長) ありがとうございます。私の意見の中にも入れたのですけれども、こだわりのある人たちの集団を作っていったらいいのではないかと思います。色々な同じような考えを持った方って必ずいらっしゃいますから、そういう人達の集団が、できれば1つの輪になっていったらいいのではないかと思います。それがまた繋がっていったりすることが可能でしょうし、世代を超えた「繋がり」と「繋いでいける人」がそこからも出てくるような気がします。それでは1つだけ先程副委員長の方から GDW (国内総充実)、おそらく今日本は一体何位になるのかなという感じが見ていてしまったよね。そういうところに向けて取り組んでいかなければいけないと思います。さっき並木さんの話をちょっと出しましたが、並木さんは僕もずいぶん昔に読んだのですけれども、だいぶ忘れているのですけれどもね。並木さんが述べていた1番重要なポイントは「企業は文化貢献しろ」、地域に貢献しろ、と。でなければ経済は動かない、お互い様だという環境を作らなければ駄目だ。この考え方は今でこそ大事なのですけれども全然その後繋がってない、それが現実なのでしょうね。

(副委員長) そうですね、特に日本はですよね。アメリカのハーバード大学では音楽で人を育てるという本が有名になっていて、大学では、芸術が人を育てて、社会を経済的に回していく、というのが結構常識的な考え方になってきているのですが。なんか日本はケチですね、一言でいってしまえば。

(委員長) 全体にそうですよね。

(副委員長) 生産性のないものと見られているのか、人の幸せにしても文化芸術にしてもね。

(委員長) 予算が全てのところですかね。これが現実です。

(副委員長) 実際に NHK なんかも企業シートがたくさんあって、買ってはくれるのですけれども企業が人をよこさないから空席が目立つという事で、どんどん NHK も企業シートを減らしている。そういった状況が実は平成の初め頃からずっとある。その代わり一般市民が買えるシートが増えているのはいいことですが、安定した収入という意味では……。NHK は困らないでしょうけれど、そういった状況があるのは確かです。

(委員長) 全体的に変わっていけばいいのですが。でも地域の中でそういった機運が高まっていけば絶対動くと思います。そういう意味では第5次もかなり展望は開けているのではないのでしょうか。そういう感じがします。それでは引き続き到達目標に関連していきたいと思います。

#### ・到達目標、取組方針について

(事務局) 資料4をご覧くださいと思います。

#### (事務局より資料4について説明があった)

(委員長) どうもありがとうございます。今資料4に基づきましてご説明いただきました。大体こういう方向性という1つのたたき台でこれについてもご意見ございましたらよろしくをお願いします。

(事務局) 取組方針の文言の補足もありましたら、よろしくお願いいたします。

(委員長) これについては全体のこれまでの中でも大体成熟してきていますし、大きく変わることはないのではないかと思います。ですからこれをどうやってもう少し違う形で展開していくか、あるいは見せていくか、そっちの方向になるのではないかと思います。ですからこの振興計画の全体のチャートに関してはそれ程変わらないのではないかと思います。こういった感じでよろしいでしょうか？何かございましたらお願いします。まあ取組方針4については「つながる、ひろがる」という形に変えていくということですね。ございませんでしょうか？それでしたらこの後は、議題そのものはないですよ？先程の補填もありますので時間を早めに終わらせたのですが、全体を通して時間内にできるだけもう少しご意見をいただけたらと思います。よろしくお願いいたします。

## 2. その他

(委員長) 先程出てこなかった部分で共生という言葉がございましたね。共生に関しても私的ですが、最近読んだ面白い本でご紹介したいのが『生物が見ている世界』(※事務局注：おそらく『生物から見た世界』岩波文庫 2005 年) ご存じですか、すごく面白いです。出たのはものすごく古いです。何年頃かな、1920 代とか 30 年代とか出ています。それが 4・5 年前に日本で完訳の文庫本で出たのです。たまたまある美術館のギャラリーショップにあったのを見つけて面白そうだなと思って買ったのです。どういう内容かという生物が見ている世界というのは、実は人間とは全く違うのだということを丁寧に書いているのですよ。彼らはどうやって環境に適応するかというところで生きている訳だから、視覚も聴覚も味覚も嗅覚もね、みんな違う訳です。例えば一番印象に残っているのはマダニです。マダニが動物の血を吸うわけです。1 年でも 2 年でも何もしないでも生きていられるらしいです。ずっと枝に止まっている。下に獲物になる動物が通るまで待っている、延々と。1 か月で来る場合もあるし、2 年間来ないかもしれない。それでも延々と待つのです。それで、来たらすっと降りて血を吸うという、生きるための環境の対応です。だから見ているのは視覚ではない。全く違う感覚でそれをとらえて降りてくる。そういうところが犬でも猫でもみんな違う。そんな中でやはり印象に残っているのが、蝶が花に飛んでいく風景。人間がそれを見ている時には、「ああ、蝶が飛んでいる、花に止まっている。綺麗だ、なんて清々しい風景なのだろう」という視点ですよ。ところが蝶にとってはそんなこと全然関係ない。蝶は蜜を吸うために花に向かっているのです。花に向かって自分自身の生きるための満足度を持つわけです。全く違う環境の中に生きているということを丁寧に色んな動物を比較しながら、もちろん、結論は共生しているよ、地球は人間だけのものではないよ、単なるモノではないよということなのですけどね。今だからこそこの本は読んでみてすごく面白い本ではないかなと。その中で空間について書かれている。視空間と作用空間と触空間の 3 つが生物にとって重要な空間だと。視空間というのは見えている空間、触空間というのは自分で触ることができる空間、作用空間というのはそこで何が起きているかいう、まさに環境ですよ。これがもっとも重要です。その作用の空間の中で動物は様々な形で自分の感覚を通して生きている。

それで常に戦っているものもいる、まあそういう関係。その作用空間というのがとってもいい言葉なのです。今でも僕自身、作用という言葉はよく使います。例えば本を読んでも、そこに書かれていることと読む人との間にある作用が最も重要なのだと。ワークショップもそうですけれども、そこで起こっていることが大事だと。何をやるかではない、そこで何が起こっているかだ。これがまさに作用空間ですよ、だから僕は作用、作用空間ってものすごくわかりやすい言葉だと思う。そういう意味で今回の第5次を進めていくにあたって、環境を作っていかなければならない、そういう場を作っていかなければいけないというのは、まさに作用する空間を作らなければいけないという事なのです。そういう事ですよ。だからこれは安い本ですから、薄い本ですからさっと読めますから、ぜひとも皆さん読んでいただくと第5次にも色んな新しい方向性が出てくるのではないかと思います。

(事務局) 今の話からすると、子ども達にとっても、見て、芸術に触れることができる、ワークショップにることによってどう何が起こっているかという事が大事なのですね。心の変化かもしれないです。

(委員長) だから場所は作っていかないと駄目ですよ。待っていても来ない、当たり前ですよ。行ったらいいじゃないか、これもまた違うのです。小さな子どもとかね、子どもにとってはそういう場所が周りに常にあるという事がとても大事で、そういうところから色々なものを吸収していく。それは遊びでも先程の経済でも全て。遊びから芸術から音楽から色々なものをそういう場所で吸収する事で自分自身の身につけるという事ができれば、必ず将来に繋がっていく。それは決して邪魔なものではなくて生きるために本当に必要なのだという感覚で、全部が繋がっていくことが1番いいのではないかな。この「作用空間」、とてもいい言葉ですよ。

(副委員長) 昔空気を読むとかいいましたよね。

(委員長) それも含めてみんな同じように、そこで起こっていることを大事にしようということをして仕掛けていくのが実はこういう委員会だったり、市だったり財団だったり文化芸術のまちづくり協議会であったりするのですよ。仕掛け役ですよ、正にね。仕掛けていく事でその空間を作っていく、と。何かございますか。

(F 委員) 今作用空間のお話を伺っていて、ちょうど今週の火曜日に明星大学に、多摩地域福祉論で少しお話をして参りました。何回かお伺いはしていたのですが、私の話だけでは学生さん達がなんかつまらなそうだなと感じたものですから、先日行った時にはアートパフォーマンスをアールブリュットの作家さんにやっていただこうと思って、はやしこうへいさんに一緒に行っていただきました。私が1時間弱話して、その後30分がはやしこうへいさんにアートパフォーマンスをしていただいく。学生さんにも近くで見てくださいと言って、見ていただいたのですけれども、その時の学生さんの目の輝きが全く別物で。リクエストしたら目の前で作りますよって、彼の場合はあっという間に作品を作り上げるのですけれども、粘土で作り上げるアートが生まれる瞬間を目の当たりにすると、学生さんたちの食いつきが比べ物にならなくて、そのライブ感というかそういう事がすごく大事だなと。多分最初の1時間のことはみんな全て忘れ去られて、残りの30分

の体験だけが鮮明に残っている時間になったのだろうなど。学生さんが写真を見せながら頼むと、あっという間に作ることを学生さん達がものすごく感動して見てくださった。やっぱりライブで見る事とか、作用空間とかそのことがものすごく空気で伝わって、リアリティが伝わるというか、ものすごく大事だなと思いますね。私が話した中で食いついてきたのは、ポケモン GO のスポットに 7 箇所選ばれているといった時。あと韓国のアイドルが来て、その時にホームページがタイムラインに上がったのですよ、というのは少し反応がありました。その後のはやしこうへいさんのパフォーマンスの時には、皆さんすごい反応がありました。講義が終わってから皆さんずっと質問されていたので、すごくいい時間だったなと思います。アートブリュットの作家さんのすごさをわかってくれるいい時間だったと思います。

(委員長) そうですね、作家さんから出てくるパワーを受け止められる場所ですよ。そういうものを大事にしていくのも、ずいぶん違うと思います。せっかくですから他に何かございますか。僕はワークショップを何年もやってきました。大事なのはそれぞれがそこから得るものがあるという発想なのです。僕は学生とずっと一緒にやってきたのですけれども、学生も得るものがある、僕も得るものがある、当然そこに参加した子どもも得るものがある。与えている発想を捨てると常に学生にもいっていた。みんなそこから得るものがあるからやっているのだからね。そういう意味で場所というのをどうやって作るかというのがすごく大事だと思います。今でもやることがあったらまだやりたいという気持ちもあります。昨年 12 月とりあえず網走でやってきました。

(事務局) はやしこうへいさんの話、うちの副市長はそこのところ詳しくて。私もその話を聞いて、以前に伊勢丹でなさっていたのですよね。写真を見せたりイメージを伝えたりすると、それを紙粘土で作って、それがものすごい人を引き付けるというか。ペンギン 1 つとっても、作って、1 つ 2 つではなくてワーツとそれを同じように作れるというか、魔法使いのようですけれども。作用空間のお話がありましたけれども、やはりそういう事を目の当たりにするということが持つ力というのは、その人に大きなものを与えるというか衝撃的というかそういう風に思います。ちょっと余談ですけれども、市民オペラの中でもオペラ学校を卒業した方が、今年やった市民オペラの声楽家の方の中にも卒業生がいらっしゃって、その方はちゃんとオーディションを受けて通って、私もその歌声を聞いたのですが衝撃的でしたね。その辺りも歌によって作用するということ。文化というのは、先程副委員長が述べられていたけれど、どうも日本は「これを効率的に、これをやったらより効率的だ」というところがある。効率的云々じゃなくて心に余裕がないと中々文化ってところに関心がいかない。それ自体が違うだろうと私は思います。もう少し生活の一部として文化を考えないといけないという風に思っています。

(委員長) そうですね。だからそれを実感できるということですよ。21 世紀に入ってから日本はほとんど効率化とコストカットがメインテーマでしたから。それがこの文化の停滞をずっと招いてきていると思うのですよね。ですから効率化とコストカットをすると文化はほんとに育たないですよ。そこはもう 1 回見直していく事が必要だなと思います。

(事務局) 場を作るのが必要だと考えているのですけれども、そこで生まれたものに対して、こ

ちらも責任を取らないといけないのかというところですね。例えば文化と文化が集まって1つのものを作るときに、その時にお金はどうする、場はどうする、その先の……。場を提供してきた側が全部引き受けて実施しなければいけないのかと考えると、ちょっと場を作るって事がどうなのかなと思う時もありました。今まであったことだと思うのですが、もう皆さん方が独立している、いろいろ活動している所に場をあげるだけでもいいのかなと今回思いました。これからのステップとしては、場を提供して何かを作っていくところでは「場を作るだけ」でいいのかなってちょっと思いました。

(委員長) そうですね、いかにも財団からの見解という感じですけど。やはり基本は「場所を提供する」がほとんどそうですね。ですから提供する部分も必要ですけども、もう線だけ引いてはいどうぞ、それくらいのフリーハンドも必要だと僕は思っています。極端な場合ですが、例えば広場がありますよね。ああいうところだって今日は自由にお使いくださいというこの一言、あるいはそこに立て看板が立つだけでも変わるのですよ。実は空気は、まさにその別の作用空間が生まれるわけですよ。そこにどんな利用の仕方があるかわかりませんが、それもある程度までは許容しつつ、動き始めたらそれはそれで面白いと思うのです。だからそういう風な柔軟な場所の作り方、ほんとに線だけで作りましたというところまで含めてあってもいいのかなと思います。まあ財団としては非常に難しいところだと思いますが。

(副委員長) そこでコミュニティが新しい空間を生むのですよね。コミュニティが生まれる事によって企画がまた勝手に生まれる。こちらは支えるだけでいけるのかもしれない。例えば街中ピアノなんて全国各地にあるけれど、ただピアノ置いただけですよね。例えばそのピアノにアールブリュット作家さんが絵を描く。それがSNSで配信されたら全国的に有名になるかもしれない。あるいは誰かが弾きに來たとかね。それがSNSで上がる。場所だけ、ピアノを提供しただけで街おこしになりますよね。きっかけというのは結構いろんなところに落ちています。

(委員長) そうですね、街中ピアノというだけで面白いですよね。ピアノを置くだけで場合によってはコミュニティが生まれることもあります。

(事務局) そうすると、例えば置いたピアノの調律はどうするのでしょうか？

(委員長) 行政はそういう点も考えますよね。やっぱり調律はしなければならない。

(副委員長) いや調律はしなくても大丈夫です。ドラえもん今回の映画、見た方いらっしゃるかもしれないですが、音楽がテーマで、ノイズが敵で美しいハーモニーが味方だ、という内容です。みんなの世界を美しいハーモニーで作ろう！って。そうしたら新進系の作曲家たちが反対して、ノイズも音楽だ、ノイズを敵にするものじゃないって話があって、それ以外はパーフェクトなのに、って。調律が狂ってくればそれはそれで面白いと言えば面白いので、ある程度そこは定期予算を組んでいただいて、そこで調律していただく。そこで決めればその音を目指して弾きたい子が来るし、狂った状態が好きって子も来ますから、やっぱりそれはそれでいいと思います。

(委員長) 年1回だけ調律するとかいうくらいでいいのかな。

(副委員長) そうですね。

(事務局) 今副委員長のお話ですが、狂ってもいいじゃないか…その許容が重要だなと。また今事務局長がいましたけど、どうしても行政側に立ちますと、その調律というところだったり、順番だったり。例えば他に弾きたい人がいるのに、あの人ばかり弾いちゃってみたい。また、弾く時間帯によっては、うるさいと言われて、時間帯をどうするか。人通りの多いとき、少ないとき、休日はどうするとか。行政はすぐ面倒くさいことを考えましてね。最終的に撤去をしようかという自治体もありました。実際撤去した自治体もあります。非常に悲しい。ヨーロッパの方ではそんな事は気にもしなくて、自由にみんな生活の一部のようにやっているのですよね。私から見ると羨ましいというか、国民性なのかなと思ったりして、風のように空気のようにピアノにふっと出会ってそれを弾いていく。そういう風土というのは日本には無いのだなと。どうしても局長がいったようなところに入っていく。そうするとどんどん色々なクレームをいってくる人が出てくる。じゃあそれをどう対応するか、忙殺をされる。なんかおかしい話だなと思うのですけれどもね。皆さんの話を聞いて許容とかゆとりが必要だと思いました。

(委員長) どこまで許容ができるかという事です。それを作っていくためにも、日常的にある程度コミュニティが小さくてもいくつかあって、それが何となく融合しているような、まあ市ってそういうものですよ、元々が。それができたら一番いいのでしょうけど。でもそんな理想論ではいけない。だったらどこを許容してどこをアレするか、考えるしかないでしょうね。さっきもノイズの話がありましたけれど、ノイズを取ってしまうと狂うものがたくさんあるですよ。本を読む時にページの音がありますよね、これもある意味ノイズですよ。でもあれが消えると読めなくなるっていう場合がある。僕も一度絵本の展覧会だったかな、せっかくだから全部ページわかるようにモニターに全ページ映そうというって映したのですよ。ところが音がない。画面が無言で展開していく。結局、明日オープンという時にやめよう、これはかえって邪魔だと言ってやめたことがあります。別のものになってしまうのですよ。手で触って読んでいるものと画面だけで単純にページがめくられていくもの。まったく別のものです。いかにノイズが大事かとあの時ものすごく感じたのですよ。その場面も含めてなんですよ。だからやはり今バーチャルと現実とないまぜですから、どちらがたくさんとかそういう問題ではない。でも、両方で生きていけるための工夫を考えるしかない。その時の共有できる場を作っていくことが必要だなと。子ども達が日常でどうしてもデジタルに触れる機会が多いと思ったら、それを止めるのではなくてそれを生かしつつ、尚且つそういう空間で遊んでいけるような楽しませ方、楽しみ方を考えていく必要もあるのかなと思います。

(事務局) 委員長がおっしゃったノイズ、本をめくる音ですか、ネットでもですね、本の紹介を見ますと、普通の画面がパチンパチンと変わるのではなくて、わざと本をペラペラとめくるのですよね。シューッと音がついてきて、芸が細かいなと思った。でもその方が安心するというか、それが本を見ているという感覚があるので、やはりノイズって必要だなと思った次第です。

(委員長) だと思います。バーチャルをより現実近づけていくための工夫もあります。というくらいの感じでだいぶもう時間が終わりに近づいてきましたので、今日の委員会は終わ

りにしたいと思います。副委員長から締め挨拶をお願いします。

(副委員長) 皆様本日はお疲れ様でございました。皆さんの色々な関わり方も、自分なりに勝手に思ったことも、先程委員長が述べていた教育そのものを刺激するという話も少し最後の方に出了ました。市民を刺激するというのが一つの私達の役割なのかな、と。ブロッコリーの話も衝撃的な話でしたけれども、ブロッコリーが東京一だと単に広報するだけではなくて、誰かに広報してもらえるように我々が市民を刺激する。さっき学校の話が出ましたけれども、学校の子も達がそういったことはそうだよと言ったときにポスターを作るとかですね、そういったことで市民が自分達、市民を刺激するきっかけを作る事で、逆にいえば経済的基盤を担ってくれるような企業も無視できなくなるのではないかなと。芸術が増えないっていうのは、今も昔も新しくも古くもある話であって、どういう風にして増えるようにしていくかという時に市民から芸術は大事だという機運が出てくると地元の企業も無視できない流れになっていくのかなと思いました。次回以降も、だいぶ広がってしまいましたけど、これをどうまとめていくのかなと大変だと思いますけれども、文化芸術と共生する街を市民が作る、みたいなことを皆さんと作っていったらいいと思います。今日はお疲れ様でした。